



千葉労働者

催開会 修研 労働者 活動 9

一月二八―二九日、西丹沢の中川に於いて、九七年労働者千葉活動者研修会が開催され、二日間わたる真剣な学習を通して、九七年を闘うに当たっての『ハラ』を打ち固めてきた。

この研修会は、新しく支部の役員になった仲間をまじえ、和気あいあいの中にも、激動の時代を生き、闘う者の主体性を充填してきた。

一日目は、中野委員長挨拶、田中書記長からの基調提起をうけ、その後、軍事評論家の山川暁夫氏から『日米安保』再定義と有事法制』の講演を二時間半にわたって受けた。

勝つために学び、団結しよう！

中野委員長は、最初に昨年の闘いを振り返り、『節々で大きな転換に遭遇した。戦後五〇年間続けた政治、経済、社会の大転換の中で、多くの労働者は驚きの目で事態を見守る中、われわれは、労働者の原点にたつて情勢を把握し、闘い、一定の役割を果たしてきた。だが全ての問題は、根本的決着に至らず、九七年の今年に持ち越された』と分析し、『本質的に危機に立ち、のたうちまわっているのは敵、支配階級の側だ。ソ連崩壊後の今日、帝国主義間での対抗・争闘は激化し、日本はアジアをターゲットに、侵略に乗り出そうとしている。こうした中から、安保再定義や行革攻勢が加

えられており、その狙いは有事体制づくりである』と強調し、行革の内容を随時暴露したあと、『勝利の道筋は、国鉄闘争の全教訓を活かし、新たな力強い潮流を形成すること。安保沖繩闘争と国鉄・反行革の闘いを結合し、橋本政権に迫ったとき展望は開ける』と、闘いと勝利の方向性を示した。

【基調】―恒常的スト体制固め JR総連解体の闘い強化へ！

むかえていた時代がいかなる時代なのか、しっかりと確認することは大事である。今たつていた時代は、日本の近代史上、「明治維新」「敗戦」につぐ三番目の大変革期に直面している。日経連の「九七年版労働研報告」では、敵の側からさえ「…科学革命、産業革命を経て、新たな『革命』の大波の時代に入りつつある」とし「万策つきた状態の戦後世界は、大競争の時代」「つづし合いの時代」絶叫しているのである。こうした中で昨年の「安保再定義」は、日米安保条約発効以来の抜本的な改悪を行い、ついに軍事外交政策への踏み切りを行なうに至っている。日本の支配階級は生きのびるためには軍事力に訴えてもアジアの支配を強めるといいうのである。今秋のガイドラインの見直しはまさに有事体制づくりの総仕上げともいえるべきエスカレートである」「こうした背

景から登場した第二次橋本政権は、『火だるま行革内閣』などと自ら宣言し、『六大改革』、実はこれは解決不可能な「六つの危機」だが、新安保体制と一体のものとして進めようとしている。仮にもこれを許すなら、膨大な首切、労働法制の解体、社会保障制度の解体をまねき、労働運動それ自体も最終的に解体されてしまう。怒りも新たに反撃の態勢を構築しなければならぬ。闘いの中核こそ国鉄闘争である』と強調し、そのあと

各支部の代表に 熱い講演をする 山川暁夫講師



JRをめぐる情勢について、二八兆三千億の累積債務問題をはじめ貨物、一〇四七名問題などを解明し、「一切の問題」決着が今年にかかっている。JR態勢はドンツマリの危機に直面している。なかでもJR体制のアキレス腱であるJR総連は、かつてない土壇場にたつている。たちあがっている国労の仲間と連帯し、「十年のツケ」をしつかりと返してやろう。恒常的スト体制をさらに固め、JR総連解体・一掃へ」と力強く訴え、参加者全員が決意を固めるものとなった。

「九七年の闘いの基本方向については、①正念場の国鉄闘争の焦点は、何よりも国鉄闘争のしめる決定的位置を自覚し、JR総連との攻防戦にうって出る。また恒常的スト体制をうち固め、いついかなる時でも敵の不法・不当な攻撃に反撃する。九七春闘については、佐倉機関区廃止阻止、三月ダイヤ改悪阻止を春闘と結合し闘う。解雇撤回闘争については、国労指導部の「政府陳情運動化」を許さず、あくまでも原則に立って闘う。こうした闘いを軸としながら、全体の情勢力関係を変えていくために、労働運動の新しい潮流を形成しなければならぬ。国鉄闘争と安保・沖繩闘争の高揚をつくりあげるため、職場・地域でその先頭にたとう」と訴え、当面春闘を闘い、地域における春闘集会などをかちとっていくことを確認した。